

はじめに

田丸卓郎が逝去した（昭和 7 年 9 月 22 日）あとに、『RÔMAZI SEKAI』（ローマ字世界）と『RÔMAZI no NIPPON』（ローマ字の日本）は追悼号を出している。これは雑誌の性格からして当然であるが、ローマ字運動に非常に熱心に取り組んだことや人柄に重点を置いて書いている人が多いように思われる。

田中館愛橘はヨーロッパ出張からの帰朝中にウラジオストックで訃報を聞いたので臨終には立ち会っていないし、その他でも臨終の様子を書いた人は少ないようである。また、他の雑誌や新聞にも追悼文が出たが、専門の物理学について詳しく書いたのは藤原咲平「田丸先生の追憶」（『気象感触』掲載）だけのように思われる。ここに少し珍しいと思われる文献資料 2 件と墓所を紹介する。

#### 1. 岩倉具實<sup>とむざね</sup>（1905～1978）「ローマ字と田丸博士」

小林勇が経営する鉄塔書院発行の雑誌『鉄塔』の昭和 7 年 11 月号に掲載された。漢字、仮名遣いを修正して、冒頭から引用する。

ローマ字と云えば田丸さんを思い、田丸さんと云えばローマ字を思い出すと云った風で、ローマ字とは切っても切れない因縁にあった田丸卓郎博士は九月二十二日の夜遂になくなってしまった。

丁度その日は数名の熱心なローマ字仲間が偶然にも先生のお宅に来合せていた。先生は奥様を通じてその由を承知されたのであったが、病苦のせいもあったであろう、その仲間達に会おうとは言われなかった。その中俄に容体があらたまって僅か身内の方々だけに見守られて最期の息を引きとられたのであった。

あれ程打ち込んでローマ字を育て上げて来た先生だ。最期に臨んでローマ字仲間に残して置きたい御言葉もきつとあつたらうに。先生はまだまだその最期を自覚しては居られなかったにちがいない。我々の仲間の者も、永い御病気を御案じ申しては居たが、こんな急なことになろうとは誰も思うものはなかった。

お葬式の前の晩、先生の死を聞きつけて集まった全国の熱心な仲間は、先生の御宅の二階で先生の死を悼みながらローマ字運動の今後の方針に就いて心置きなく話し合った。その時「物理学者の田丸博士が一体どうした訳であれ程迄にローマ字問題にカゴブを入れられたのであろうか」と云う事が一同の話題にのぼったのである。

田丸先生がローマ字運動にハマリコンで居られることに就いて世間に非難のあったのは事実である。物理学界では先生の様な優秀な頭脳をキキメのありそうにも見えないローマ字運動の為に費やすことを惜しがっていたし、国字改良の方面では「国字改

良は国語学の問題だ。御門違いの物理の先生に何が解る」と言って先生の仕事を重んじようとはしなかったのである。

その御通夜の晩は物理出の仲間も居合わせたので、一同は先生の物理学上に於ける業績に就いて、あらためて色々の話を聞いた。先生は物理学の上でも人並以上の仕事をして来られたのである。又ローマ字の為だからと云って学校の務めを怠られた筈もない。だから、物理学界で先生を非難したとすれば、それは「ローマ字さえしなければ、先生は人の二倍も三倍もの仕事が出来ただろうに」と云う気持ちだったのであろう。でも非難する者の中には、「ローマ字は結構だが、そんなにローマ字に熱中するなら大学をやめてからにするがよい。一教授の後ガマにはオレになる」。こんなに考えていた人も案外あったかもしれないと穿った観察をする仲間もあった。

兎に角、先生は物理学界の非難を押し切ってローマ字運動を続けられた。国語学の方面の非難に対しては、先生はその「ローマ字国字論」の序文に於て幾つかの箇條をあげて自ら弁護して居られる。

先生の頭の中で、その専門とローマ字とが世間で普通に考える様には、決してチグハグなものでなかった事だけは確かだ。国民の生活を漢字常用のクビキから解放する為のローマ字運動の必要は云うまでもない。先生にとっては日本の物理学の進展の為にもローマ字の採用は欠く事の出来ない条件の一つであったのである。

この後も日本式ローマ字に取り組んだ切っ掛けや普及活動に尽力したことが書かれているが省略する。

## 2. 田丸卓郎逝去時の勲章申請資料

国立公文書館デジタルアーカイブに田丸が逝去した時の勲章申請資料が出ている。これには、主に物理学者としての功績が整理して挙げられている。

この叙勲申請書類の流れは、第1段として文部大臣（文部省）から内閣総理大臣、第2段として内閣総理大臣と賞勲局総裁しょうくんから天皇（宮内省）である。第1段は長いので、要約された第2段を紹介する。第1段には東京帝国大学で作成した下書きが附属している。附属書には叙勲陞任職務履歴書しょうにん、論文の写しが含まれる。

なお、筆者の方で、原文の漢字仮名づかいを修正、カタカナをひらがなとし、濁点、句読点、読みを追加した。



『鉄塔』昭和7年11月号  
表紙

故東京帝国大学教授田丸卓郎 勲章加授の件 右謹<sup>つつしみ</sup>て裁可<sup>さいか</sup>を仰ぐ

昭和七年十月一日

内閣総理大臣子爵 齋藤實

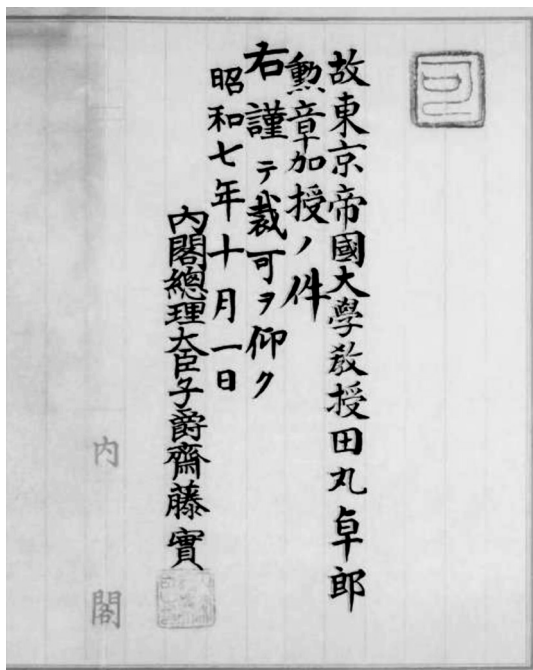
内閣総理大臣 賞勳局総裁

故東京帝国大学教授正三位勲二等田丸卓郎儀は、明治二十八年帝国大学理科大学物理学を卒業し、第五高等学校教授、京都帝国大学理工科大学助教授等に歴任し、次で東京帝国大学理科大学助教授に転じ、同四十年同大学教授に<sup>しょうにん</sup>陞任し、理論物理学第二講座を担任す<sup>じらい</sup>。爾来、今日に至るまで終始後進の教導と学理の攻究とに専念し、幾多の俊髦<sup>しゅんぼう</sup>を斯界<sup>しかい</sup>に輩出せしめたり。同人は夙に我が航空学界に関与して其の<sup>うんちく</sup>蘊蓄を傾倒し、低温低圧風洞の設計製作、飛行機に対する空気運動の測定器、標準大気及高度計の観測値の補正、方向速度計及田丸式高度計等を考案せり。殊に田丸式高度計は現に我が軍器に利用せらる。同人は又地震学界に於て業績を挙げ、上下動地震計並びに加速度地震計の如きは世界的研究として知らる。尚多年国字問題を研究し日本式ローマ字を以て困難なる国字問題を解決せんことを期し、努力する所<sup>すくな</sup>尠からず。其の他各種の委員、会員、評議員に挙げられ、能く其の職責を尽したる等功績顕著の者に候処、九月二十二日死去せる趣に付、此際特に同日附を以て旭日重光章を加授せられ度、此段<sup>いんさい</sup>允裁<sup>いんさい</sup>を仰ぐ。

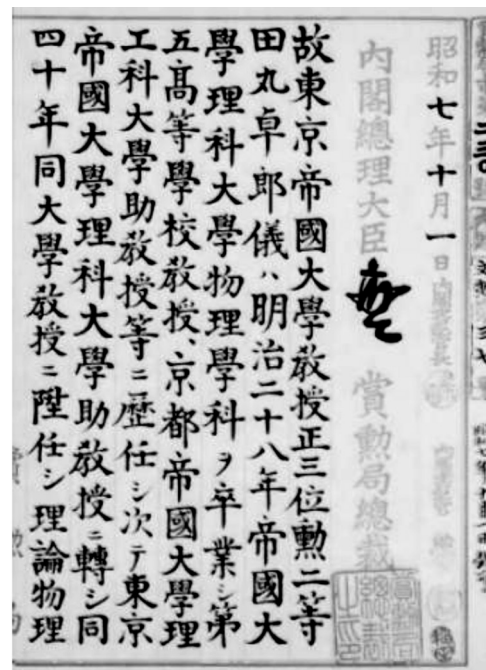
追て本件擬叙勲等に付ては主務省と協議済<sup>これあり</sup>に有之候

(語釈)

俊髦 (しゅんぼう) : すぐれた人。 蘊蓄 (うんちく) : 深く積み貯えた知識。 斯界 (しかい) : この分野。 允裁 (いんさい) : 天皇の決裁。



勲章申請資料 表題部分



勲章申請資料 本文冒頭部分

内閣総理大臣の齋藤實は岩手県水沢の出身であり、同じ岩手県出身の田丸を推薦するのも奇しき縁であろう。

### 3. 清林寺の墓所

田丸卓郎の墓は東京都文京区向丘2丁目35-3清林寺にある。田丸が勤めていた東大の西側の本郷通りを北へ進み、都道452号線で東へ折れるとすぐである。



清林寺本堂



田丸卓郎の墓

正面の文字は田中館愛橘によるローマ字の筆記体である。活字体で転記する。

Tamaru-Takurô no Haka Meidi5-Syôwa7 (右下に愛橘のイニシャル A)

(裏) 2592n. 11gt

また、この寺には卓郎の弟でローマ字普及に尽力しながら39歳で亡くなった陸郎ろくろうの墓もある。卓郎の墓とは離れた、寺の正門から本堂に向かう広場の左側である。墓と記念碑を兼ねたような形で、中央部とその左に縦書きで

田丸陸郎墓 大正三年七月三日没 行年三十九  
とあり、上部にはローマ字書きで

HAZIMETE SYÔGAKKÔ DE RÔMAZI WO  
OSIETA TAMARU-ROKURÔ

とある。

(附記) このような投稿を勧めていただいた千葉明さんに感謝致します。

(謝辞) 本稿は『Rômazi no Nippon』dai 672 gô (2020n 10 gt 1 nt) 掲載文の転載である。ご快諾いただいた日本のローマ字社理事長・茅島篤様に感謝致します。

(転載附記) 田丸卓郎は昭和7年9月22日に亡くなり、26日に清林寺で葬儀・告別式が執り行われたが、寺田寅彦は門弟総代として弔辞を述べている。



田丸陸郎の墓